



Title	アラン=フルニエ『グラン・モーヌ』における「失われた時」と「失われた場」
Author(s)	和田, 章男
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2002, 42, p. 31-52
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11534
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アラン=フルニエ『グラン・モーヌ』における 「失われた時」と「失われた場」

和 田 章 男

アラン=フルニエは1886年10月にシェール県ラ・シャペル・ダンジョンに教師の長男として生まれ、1914年9月、第一次世界大戦中ヴェルダン近くで戦死した。27歳という若さであった。彼が生きた時代は19世紀末から20世紀初頭にかけての、いわゆる「ベル・エポック」と呼ばれた時代で、フランスは経済的にも文化的にも大いに繁栄するとともに、科学技術の発展が人々の生活に大きな変化をもたらしつつあった。自動車、飛行機、電話などが普及することにより、空間は狭まり、生活のリズムは早くなつた。またとりわけ首都パリは電気照明により新しい世紀を象徴する都市となり、1900年に開催されたパリ万国博覧会は文字通り「光の祭典」となつた。アラン=フルニエは万博が開かれる2年前の1898年にパリのリセ・ヴォルテールに入学しており、彼が見たのはそのような光あふれる新時代のパリであった。彼の名を不滅のものとした青春小説『グラン・モーヌ』は1910年に書き始められ、1913年7月から11月にかけてNRF誌に発表されたのだが、それはまさしく20世紀という新しい時代の幕開けを背景としてあったことを念頭に置いておこう。

さて、アラン=フルニエの唯一の小説『グラン・モーヌ』は主人公オーギュスタン・モーヌと語り手フランソワ・スレルを中心とする思春期の少年たちの愛と冒險の物語であるが、文学史的観点から見て興味深い冒頭文によって始まっている。

『Il arriva chez nous un dimanche de novembre 189...』
「彼は189...年11月のある日曜日私たちの家にやって来た。」

三人称および単純過去形の使用は、小説の黄金時代である19世紀の伝統的な小説形式に従つているように見える。また冒頭において『chez nous』、『un dimanche de novembre 189...』というような場所および時の設定も一見伝統的に思われる。しかしながら、実は文章の内部から伝統の枠組みを破っているのである。まず『il』というにはそれが誰であるか同定されなければならないのだが、ここではそれがなされないまま、いきなり登場している。場や

時のしるしはあるものの、「私たちの家」とはどこなのか不明であり、また《189...》というように年代も曖昧にされている。さらには《chez nous》の中には既に「私」という一人称が含まれており、実際この冒頭文の後、段落を改めて次のような文が続いている—《Je continue à dire《chez nous》, bien que la maison ne nous appartienne plus. Nous avons quitté le pays depuis bientôt quinze ans et nous n'y reviendrons certainement jamais.》「私は今でも「私たちの家」と言っているが、その家はもう私たちのものではない。その土地をあとにしてからまもなく15年が経とうとしていて、私たちは二度とそこへ戻ることはあるまい。」ここでは語り手の「私」が明瞭に現れ、語り手の現在を中心に複合過去形、未来形が使用されている。見かけは客観的な物語の始まりのように見えながら、実のところ語り手「私」による回想の物語なのである。三人称体が中心だった19世紀小説から一人称体が主となる20世紀小説への移行がこの冒頭文に巧みに表されているが、これはおそらく作家自身意識していたことと思われる。

I. 年齢の転移、時代の転移

冒頭文における《189...》という年代は検討に値する。曖昧にしているという事実は従来の歴史小説からの背反とも考えられるが、やはりこの年代には意味があるようと思われる。実のところ、⁽⁴⁾草稿においてモーヌがやって来るのは「1891年12月」とされており、年代が明確に記されている。自伝的小説とも言われるこの小説を考察するにはやはり、作家の実人生と物語を比較することは不可欠の作業であろう。もっともわれわれの関心は、モデルや源泉を探ることではなく、作家が現実の材料にどのような加工を施したかを調べることによって、この小説の特徴を明らかにすることである。アラン=フルニエの生い立ちを振り返って見るなら、1891年にはフルニエ一家がシェール県ラ・シャペル・ダンジョン (La Chapelle d'Angillon) から同県の南にあるエピヌイユ・ル・フルリエル (Épineuil-le-Fleuriel) に転居したことがわかる。ただし父がその町の小学校の教師に任命されたのは10月のことであり、草稿中の「12月」という月は後にも検討するように物語上の意味がある。ここで小説の語り手と作者の年齢を比較してみよう。

«Nous étions pourtant depuis dix ans dans ce pays lorsque Meaulnes arriva. J'avais quinze ans. C'était un froid dimanche de novembre, le premier jour d'automne qui fit songer à l'hiver.»

「それでも、モーヌがやって来たとき、私たちがそこに住みついてからもう10年が経っていた。私は15歳だった。それは11月の、寒い日曜日で、秋になってからの最初の、冬を思わせ

る日だった。」

アラン=フルニエは生まれてから5歳までラ・シャペル・ダンジョンに住み、1891年から1898年まで、つまり5歳から12歳までエピヌイユ・ル・フルリエルで暮らしている。どちらもソローニュ地方の小さな田舎町である。⁽⁷⁾ それ以降はパリ、ブレスト、ブルジョなど都市のリセを転々としながら、1903年（17歳）にはパリのリセ・ラカナルに入学し、首都が生活の中心となってゆく。要するに、子供時代=田舎、青春時代=都市というように、アラン=フルニエの短い人生の前半と後半が時間的・空間的にはっきりとした対照を描いているのだ。このことは小説における時間・空間の問題を考える上で、興味深い事実である。さて、語り手の住むサント・アガトという町にモーヌがやって来るのが、草稿における通り1891年であるとするなら、語り手の「私」は15歳であるのに対して、作者は5歳である。すなわち語り手は作者より10歳年上ということになる。ところで語り手の現在の年齢はいくつぐらいであろうか。後に見るように、『グラン・モーヌ』は5年間におよぶ物語で、語り手フランソワが15歳から19歳、2歳年長のモーヌが17歳から21歳までの青春時代が語られている。先の引用で語り手が述べているように、フランソワの家族がサント・アガトを離れてから15年が経つという。家族がそこを去ったのがいつなのか明らかではないが、フランソワは17歳の時にその町を離れている。家族の転居はそれより少し後のことなので、語り手の現在の年齢は32歳より数歳上ということになる。作者アラン=フルニエが小説の執筆を開始したのは1910年、つまり24歳の時であるが、フランソワは作者より10歳年長に設定されているのだから、語りの現在は1910年頃ということになる。草稿の通り物語の始まりが1891年のこととするなら、その年を含めて5年間の物語が終了するのは1895年のことであり、それから15年が経過しているのだから、これもやはり1910年ということになる。まわりくどい議論になったが、要するに語り手は1910年頃の時点から1890年代の青春期の物語を回顧的に語っているということである。もちろんこれは草稿に記されている「1891年」という年号を物語の始まりと想定した上での議論である。

それでは何故決定稿においては「189...年」というように年代をぼかしているのであろうか。また作者と語り手との間にある10歳という年齢の開きは何を意味するのであろうか。確かに、客観的な歴史小説に見られるような正確な年号というものはアラン=フルニエの回想的物語にとってあまり意味がなかったのであろう。しかしながら、物語が1890年代に設定されていることは重要であると思われる。ここで主人公モーヌと作者の年齢を比較することが必要になる。『グラン・モーヌ』の物語の主題は、モーヌがイヴォンヌ・ド・ガレーに対して抱く精神的恋愛（もっとも結婚して、一人娘を授かることになるが）とヴァランチーヌ・ブロンドーとの恋愛関係である。⁽⁸⁾ 後者との関係は、イヴォンヌに対する裏切りであるばかり

か、彼女の兄であり、またモーヌの親友ともなるフランツ・ド・ガレーの元フィアンセであることがわかってからは、友人に対する裏切りともなる。小説上の二人の女性との関係が作家の実人生の経験に基づいていることは周知のことである。アラン=フルニエは1905年、19歳の時にイヴォンヌ・ド・キエヴルクールと運命的な出会いをするが、あこがれだけに終わる。実のところ彼も後に知るように、彼女は既に婚約していたのである。また1910年、23歳の時にジャンヌ・ブリュノーと出会い、2年間恋愛関係を持つ。これらはともにパリでの出来事である。他方、小説においては、この二つの恋愛経験を関連づけることによって、物語の緊張を生み出しているのだが、モーヌがイヴォンヌ・ド・ガレーと出会うのは17歳の時で、ヴァランチーヌと関係を持つのは19歳の時のこととされているように、どちらの経験も10代に設定されている。つまり、大人あるいは青年時代の体験を青春時代に移し替えていと言えよう。後に考察することになるが、物語の舞台となっているシェール県のサント・アガトという架空の田舎町とその周辺は、作家が子供時代を過ごしたラ・シャペル・ダンジョンとエピヌイユ・ル・フルリエルを合成したものと言われているように、青春期の少年たちを作家の子供時代の背景に置いているのだ。このことが作者と語り手の10歳の年齢差を説明している。

「189...年」は言うまでもなく1890年代を示しており、そのことにこそ意味があるようと思われる。1890年代はアラン=フルニエが子供時代を過ごした時期であるにとどまらず、19世紀末という時代である。彼の青春時代もまた恋愛体験も20世紀に入ってからのことである。しかも冒頭で簡単に触れたように科学技術が人々の生活を大きく変化させつつあった新世紀の象徴とも言える首都パリにおいてのことであった。20世紀の体験を19世紀末に移し替えるという時代の転移、およびパリでの体験を田舎に設定するというトポスの転移は意図的な作為であると考えられる。実際この小説の中では、古き時代の衣装、建物、ろうそくやランプの照明、乗り物（鉄道には言及されているが、主な乗り物は馬車であり、せいぜい自転車が新鮮なスピード感をもたらしている程度である⁽⁹⁾）などが描かれており、アラン=フルニエは個人的にも社会的にもまさしく失われてゆこうとしている時代を文学によって残そうとしていたのではないだろうか。この小説がプルーストの『失われた時を求めて』の第一巻『スワン家のほうへ』と同じ1913年に発表されたことは偶然であるにせよ、世紀の移り変わりを体験した作家としての類似した精神を共有していたとも言えよう。

II. 時間と構成

青春期という子供時代と大人時代の間に位置する過渡期をテーマとする『グラン・モーヌ』において、時間の経過は物語の重要な要素である。時間の表示（特に月の表示）が折々

に与えられ、時間の流れを追うことは容易である。この小説は3部から構成されているが、各部が時間の流れとどのように対応しているかまとめるに以下のようなになる。

第1部 (17章)：1年目11月～翌年2月

第2部 (12章)：2年目2月～4月、モーヌの手紙 (4月、6月、11月)，翌年2月
(空白の時間①)

第3部 (16章)：3年目8月→(空白の時間②)→4年目2月～10月
(空白の時間③)

エピローグ：5年目9月末

第3部は16章から成るが、エピローグを合わせると第1部と同じ17章となることから、全体としてシンメトリックな構成となっていることがわかる。そして第1部が物語の1年目、第2部が2年目、第3部が3年目～4年目、エピローグが5年目というように、部の構成が時間の経過と呼応しているように見える。また、第1部の終わり、第2部の始まりと終わり、そして第3部における4年目の始まりがそれぞれ2月となっており、この月が物語構成の節目となっている。特に4年目の2月はモーヌとイヴォンヌが結婚する月であって、彼の青春時代の冒険の終着点となりながら、その結婚式の翌日にはまた旅立ってゆくことから、大人としての新たな旅立ちの月ともなっており、物語全体の節目でもある。2月という真冬の季節が物語の基盤となっていることもあり、冬の冷たい風に対する言及が数多く見られ、それが一所に留まることのないモーヌの青春の冒険を象徴しているとも言えよう。

確かに、第1部から第2部にかけては、時間の切れ目がないことからもわかるように、モーヌおよび語り手フランソワの青春時代の物語である。それはモーヌの到着によって始まり、その出発によって終わる。

«L'arrivée d'Augustin Meaulnes, qui coïncida avec ma guérison, fut le commencement d'une vie nouvelle.»⁽¹¹⁾

「オーギュスタン・モーヌの到着は、ちょうど私の股関節が治ったときと一致していて、新しい人生の始まりだった。」

語り手フランソワは股関節痛のために、外で遊ぶことも稀で、閉じこもりがちな子供であったのだが、モーヌが到着したときに治癒する。モーヌはまさしく外部世界への旅立ちに誘う人物であり、彼の到来はフランソワにとって「新しい人生」＝青春の始まりであるとともに、この小説の始まりである。

«Mais quelqu'un est venu qui m'a enlevé à tous ces plaisirs d'enfant paisible. Quelqu'un a soufflé la bougie qui éclairait pour moi le doux visage maternel penché sur le repas du soir. Quelqu'un a éteint la lampe autour de laquelle nous étions une famille heureuse, à la nuit, lorsque mon père avait accroché les volets de bois aux portes vitrées. Et celui-là, ce fut Augustin Meaulnes, que les autres élèves appellèrent le ⁽¹²⁾ grand Meaulnes.»

「ところがそこへ誰かがやって来て、そういう平和な子供の喜びを、そっくり取り上げてしまつたのだ。夕べの食卓に顔をうつむける母の、やさしい顔を照らしていた蠟燭の火を、その誰かは吹き消してしまつた。夜、父がガラス扉に木の鎧戸を下ろしたあと、私たち幸福な家族が囲んでいたランプを、その誰かが消してしまつた。その誰かこそは、オーギュスタン・モーヌであり、彼のことを他の生徒たちは、「グラン・モーヌ」と呼んだ。」

もうそくとランプは家庭を照らす光であつて、その周囲には父や母が存在する。それはまさしく家族の象徴である。それはまた内部の光でもあるが、モーヌはあたかも外から吹き込む風のようにそれを吹き消して、家族の平和を破つてしまつ。モーヌの到着とともに始まる青春は、家族からの自立を意味するとともに、外部への旅立ちの誘いとも言える。このセンテンスに関して、草稿に興味深い修正が見られる。『venir』、『enlever』、『souffler』、『éteindre』という動詞をすべて単純過去形から複合過去形に直しているのである。注釈者は「さもなければ完全に死んでしまつたであろう過去をわれわれのもとへ連れ戻す」と述べている⁽¹³⁾が、むしろ複合過去形の使用によって、現在から過去を振り返つて物語る語り手の存在と役割が明瞭に意識される。つまり、モーヌの到着を客観的・歴史的出来事として記述するではなく、それが語り手の記憶にあざやかに残る画期的な出来事として語られているのだ。二度と戻らぬ青春という失われた過去に対する郷愁をも感じさせると言つてもいいだろう。

第1部冒頭で、モーヌの到着とともに青春が始まるとするなら、第2部の終わりにおいて、モーヌはイヴォンヌを探しにパリに行くべく語り手の家から出ていってしまうのだが、モーヌのこの出発とともに青春が終わる—『Quant à moi, je me trouvai, pour la première fois depuis de longs mois, seul en face d'une longue soirée de jeudi—avec l'impression que, ⁽¹⁴⁾ dans cette vieille voiture, mon adolescence venait de s'en aller pour toujours.』「私は、長かった数ヶ月以来はじめて、ひとりぼっちで木曜の晩の長い時間を迎えるようとしていた—自分の青春が、たった今、あの古い馬車に乗つて、永遠に去つていったのだと感じながら。」モーヌが乗つていく「あの古い馬車」はまさに19世紀末という過ぎ去つた時代を象徴しているように思われるが、それとともに「私の青春」が去つていくというように、ここでは社会の歴史と個人の歴史が比喩的に重ねられているとも考えられよう。モーヌの旅立ちは第2部

10章のことであるが、最終章である12章においては、パリからの手紙で彼の空しい探索が知られ、次のような文で締めくくられる—«En février, pour la première fois de l'hiver, la neige tomba, ensevelissant définitivement notre roman d'aventures de l'an passé, brouillant toute piste, effaçant les dernières traces. Et je m'efforçai, comme Meaulnes me l'avait demandé dans sa lettre, de tout oublier.»⁽¹⁶⁾「2月に、その冬はじめて雪が降り、去年の私たちの冒険物語をすっかり埋めてしまった、すべての足跡をかき消し、最後の痕跡をかき消して。そして私は、モーヌに手紙で言われた通り、何もかも忘れようとした。」

さて、『Fumer la cigarette』「煙草を吸うこと」という句で始まる第3部では、大人となった作中人物たちが現れる。フランソワは股関節の痛みが完全に直り、決然とした若者になっている。モーヌには無精ひげが生えかけており、霧のベールがかかったような不可解さをもって登場する。第1部～第2部と第3部との間には確かに青春時代から大人時代へという大きな変化が感じられる。その変化は作中人物たちの上に刻まれるばかりでなく、取り戻すことのできない時間の経過が強く意識されるようになる—『Le temps passa.』(p.287)「時が過ぎた。」、『Des semaines, des mois passèrent. Époque passée! Bonheur perdu!』(p.347)「幾週間も、幾月も過ぎた。過ぎ去った時代！失われた幸福！」、『Le temps passa.』(p.378)「時が過ぎた。」ところで、第1部と第2部との間にはまったく時間的隔たりがないのに対して、第2部と第3部の間に6ヶ月間の空白の時間が存在することは注目に値する。第2部は、物語が始まってから3年目の2月で終わっているが、第3部は同年の8月から始まっているのだ。ところで、構成と時間的経過の関連を示した上の表におけるように、この5年間におよぶ物語には3つの空白の時間が存在する。「空白の時間②」は、モーヌがシェール川の岸辺での野遊びでイヴォンヌと再会してから二人の結婚に至るまでの5ヶ月間に相当し、また「空白の時間③」は、モーヌがフランツの援助の呼び声に応じて、結婚の翌日にヴァランチーヌの探索の旅に出た期間で、その探索の結果、フランツとヴァランチーヌは結ばれる。結婚に至る幸福な過程はこの小説ではほとんど重視されることなく、あこがれの対象との隔たりこそ物語のテーマであり、青春の冒険へ誘うものであるとも言えるだろう。しかしながら、われわれが注目している「空白の時間①」は別の意味を持っているように思われる。

ところで、この小説には二人の語り手がいると言ってよい。第一の語り手は言うまでもなくフランソワであるが、主人公モーヌが第二の語り手の役割を持っており、第1部の3日間の冒険物語、第2部のパリからの手紙、そして第3部のモーヌの手記において、モーヌが言説の担い手となっている。口頭による語り、通信文、読み手を想定しない個人的な手記というようにそれぞれの形態は異なりながら、フランソワが直接知ることのできない彼の体験が彼自身の言説によって明らかにされるのである。とりわけ第3部の最後の3章(14章～16

章) はモーヌの手記をフランソワがわかりやすく転写したものとされており、『Le secret』⁽¹⁷⁾ 「秘密」という章のタイトルからもわかるように、モーヌの不可解な苦悩、罪の意識の原因を遡及的に明らかにしているもので、最も重要な章となっている。この手記において語られているのは、モーヌがパリでイヴォンヌを探している間に、ヴァランチーヌと知り合い、恋愛関係を持つようになるのだが、彼女がフランスのフィアンセであったことがやがて判明する経緯である。モーヌが彼女と関係を持つようになったのが、3年目の2月から6月のことであり、8月25日にはブルジュへ彼女を探しに行っている。すなわち、この秘密の物語は第2部と第3部を隔てている空白の6ヶ月の間に起こったことなのだ。第2部から第3部への移行において見られる大きな変化、つまり青春期から大人への変貌の原因はまさしくこの空白の時間にあり、小説の末尾において披露されるモーヌの手記がいわば空白を埋め、遡及的にモーヌの謎が明らかにされる仕組みになっているのだ。

III. 『グラン・モーヌ』のトポグラフィー

主人公モーヌは道に迷って、偶然ある城館にたどり着く。そこで彼は子供たちがすべてをしきっている不思議な祝宴に立ち会うことになるが、それがフランス・ド・ガレーとヴァランチーヌ・ブロンドーとの婚礼である。しかし花嫁は城館に来る途中で逃げ出してしまい、この結婚式は頓挫してしまう。モーヌはこの間にフランスの妹イヴォンヌと運命的な出会いをすることになる。彼がサント・アガトの学校を抜け出してから4日後に村に馬車で戻ってくるが、途中眠ってしまったこともあり、城館がどこにあるのかわからなくなってしまう。第2部においては、その城館の探索が物語の主要な筋であり、地図が重要なモチーフとなっている—『Meaulnes [...] était resté, durant la dernière récréation du soir, assis sur son banc, tout occupé à établir un mystérieux petit plan, en suivant du doigt, et en calculant longuement, sur l'atlas du Cher.』⁽¹⁸⁾ 「モーヌは夕方の最後の休み時間の間、自分の席に座って、シェール県の地図の面を指でたどり、長い時間をかけて計算しながら、不思議な小さな地図を作るのに没頭していた。」小説の中でしばしばある場所がどのくらいの距離にあるかが示されており(以下の地名表を参照)、イヴォンヌ・ド・ガレーという女性を探すことは地理上の探索をすることを意味している。しかも、1908年~1909年頃の小説のタイトルが『Pays sans Nom』(「名のない国」)であったことを考えれば、この物語において「場所(トポス)」がいかに重要であるかわかるであろう。

⁽¹⁹⁾ 以下に草稿の初期段階に現れる地名と決定稿における地名をまとめてみる。下線を引いたものは架空の地名であり、それ以外は実在のものである。

【草稿初期段階における地名】

モーヌ Meaulne

ロージュ Loges

サント・ソランジュ Sainte-Solange

シャルマン Challlement

エピヌイユ Epineuil-le-Fleuriel (→サント・アガト)

サント・アガト Sainte-Agathe (→レ・サブロニエール)

ソルゼー Saulzais (→ル・ヴィユー・ナンセー)

ヴァロン Vallon (→ラ・ガール)

ユルセー Urçay (→ヴィエルゾン)

注) カッコ内で示した地名は決定稿において使われたもの

【決定稿における地名】

サント・アガト Sainte-Agathe: フランソワの住む町

ラ・フェルテ・ダンジョン La Ferté-d'Angillon: モーヌの故郷の町; サント・アガトから14キロ離れている。

ヴィエルゾン Vierzon: 駅のある比較的大きな町; サント・アガトから15キロ

ラ・ガール La Gare: サント・アガトから最も近い駅のある町

ラ・モット La Motte: モーヌがヴィエルゾンに向かう途中に通る村 (ラ・シャペル・ダンジョンの北8キロ)

ル・ヴィユー・ナンセー Le Vieux-Nançay: その近郊にイヴォンヌの住む屋敷がある; モーヌが立ち寄る農家から14キロ (ラ・シャペル・ダンジョンから西約20キロ)

レ・ランド Les Landes: 上記の農家から5キロ (ナンセーの近くの村)

レ・サブロニエール Les Sablonnières: イヴォンヌの屋敷がある場所の地名

サン・ブノワ・デ・シャン Saint-Benoit-des-Champs: フランソワが教員を務める村; レ・サブロニエールから3キロほど

サン・ルー・デ・ボワ Saint-Loup-des-Bois

パリ Paris: モーヌがイヴォンヌを探しに行くが、ヴァランチーヌと運命的な出会いをする。

ブルジュ Bourges: フランツがヴァランチーヌと出会う。

注) カッコ内には現実の地理上の位置を示す。

興味深いことに、執筆の初期段階において見られる地名はすべて実在のものである。そして決定稿において用いられる架空の地名の多くは主要人物たち (フランソワ, モーヌ, イヴ

オンヌ、フランツ) が住む場所である。このことからだけでも、作家が現実を素材としながら、それに加工を施し、小説化していることがわかる。架空の人物たちが住む場所にも架空の名を与えることにより、想像上の文学空間を創りだしていると言えようが、周辺の土地や町の名は実在のものであるという事実もまた見逃すことはできない。それらはすべてアラン=フルニエが子供時代を過ごしたシェール県にある町や村である。また「モーヌ (Meaulnes)」という主人公の名もシェール川沿いにある村の名前 (Meaulne) に由来していることも、この小説における土地の重要性を証している。さらに女性と場所との関連にも注意すべきであろう。上でも述べたが、モーヌが体験する二つの恋愛は作家の実人生における経験を元にしているのだが、それはどちらもパリにおける出来事である。小説においてモーヌがイ(20) ウォンヌと出会うのはソローニュ地方の田舎においてである。それに対して彼がヴァランチーヌと知り合うのはパリのことであり、またフランツが彼女と出会うのはブルジュであって、ともにヴァランチーヌとの出会いは都会でなされる。つまりイウォンヌとヴァランチーヌという二人のヒロインはそれぞれ田舎と都会というトポスと結びついているとも言えるのだ。

1. 草稿におけるトポグラフィー

『グラン・モーヌ』の草稿はクラシック・ガルニエ版の編者によって大きく3段階に分けられ、それぞれ『Notes préliminaires』、『Plans』、『Ébauches』と命名されている。『Ébauches』の中にもかなり古い段階のものもあり、その執筆順はかならずしも直線的ではないが、少なくとも『Notes préliminaires』、『Plans』そして『Ébauches』の古い層においては、フランソワとモーヌが住むのは、エピヌイユ・ル・フルリエルであり、これは作者が5歳から12歳にかけて暮らした町である。上に掲げた草稿に見られる地名はすべてその周辺に実在するものばかりである。つまりアラン=フルニエにとって子供時代の記憶の場である。語り手にとってエピヌイユおよびその周辺のみが彼の生活の場である—『Toi, petit Henri ; tu te mari je vois ta destinée je sais bien ce que tu feras. Tu habiteras toujours ici. Vallon de ce côté et Saulzay de l'autre ce sera pour toi la fin du monde. Toi petit Henri, tu te, puis tu te mariras, parce que Tu es un sage petit enfant. Tu sais bien (21) qu'il n'y a pas de pays plus beau qu'ici celui-ci.』「ねえ、アンリ坊や、おまえは結婚するわしにはおまえの運命がわかる わしはおまえが何をするかよくわかっている。おまえはずっとここに住むだろう。こちらの方はヴァロン、あちらはソールゼーがおまえにとって世界の果てなのだ。ねえ、アンリ坊や、おまえは おまえは 結婚する というのも おまえは賢い子だ。ここより美しい土地はないってことをおまえはよく知っているだろう。」ヴァロンおよびソールゼーはエピヌイユからそれぞれ北西方向と南東方向に15キロほど離れた

ところにある実在の町で、作家にとってと同様、子供時代の語り手の閉じられた小世界の限界を表している。他方、モーヌはこの限られた空間から飛び出し、モミの森を通って冒険の旅に出てゆくのであり、冒険はまさしく内部から外部へ、あるいは既知の場から未知の場への出発を意味している。

決定稿においてフランソワが住む町はサント・アガトという名になっているが、実在のサント・アガトはエピヌイユ・ル・フルリエルの西方にある礼拝堂のこと⁽²²⁾で、そこには聖女アガトの遺骨が祭られている。創作の初期段階においては、サント・アガトの礼拝堂こそがモーヌとフランソワの冒険の目的地である。

«Description de la chambre avec la colline de Sainte-Agathe dans le paysage. 1er épisode — En pleine nuit, on aperçoit par la lucarne au-delà du jardin, entre les arbres, on aperçoit très loin des collines nues et un bouquet d'arbres. Il réveille l'autre et lui demande ce qu'il y a là-bas. «Réponse». Alors il y part en pleine nuit et ne revient qu'au matin, avec un ossement volé en poussière.»⁽²³⁾

「部屋の描写、風景の中にサント・アガトの丘が見える。第一のエピソード—真夜中に天窓から庭の向こうに、木々の間に見える、とても遠くに草木の生えていない丘と木立が見える。彼は友を起こし、向こうには何があるのか尋ねる。「答え」。そこで友は真夜中に出かけ、朝になってようやく帰ってくる、埃だらけの遺骨を持って。」

«Meaulnes ne répondit pas. Après un moment, il se retourna pour demander toujours tout bas : «Quelle est cette colline très loin avec un bouquet d'arbres?»

C'est la colline de Sainte-Agathe. Elle n'est pas de la commune : elle est au moins à 20 kilomètres.

C'était un des grands désirs de François, je le sais, d'aller un jour à cette chapelle. De fait elle était à peu près inconnue dans le pays ; il l'avait, comme Meaulnes à sa lucarne, découverte un soir d'été entre les arbres lointains, d'un petit mur de la cour.»⁽²⁴⁾

「モーヌは答えなかった。しばらくして、彼は振り向いて、相変わらず低い声で尋ねた—「木立に囲まれたあの遠くの丘は何というんだい。」

それはサント・アガトの丘だ。この村のではない。少なくとも20キロは離れている。

いつかその礼拝堂に行くことがフランソワの最大の願望の一つだったということを私は知っている。実際それはこの地方ではほとんど知られていない。天窓からモーヌが見たように、彼は夏のある夕暮れに、中庭の小さな壁の上から、遠くの木々の間にそれを見つけたのだっ

た。」

このように、フランソワの部屋から遠くに見える丘の上のサント・アガト礼拝堂は彼のあこがれの地であり、モーヌはその夢を実現すべく冒険に出かけ、聖女アガトの聖遺物を持ち帰る。⁽²⁵⁾ここには中世の騎士道物語、とりわけ聖杯探索伝説に対する暗示も認められるが、実のところ決定稿においても、このような騎士道物語的な要素は残されている。モーヌが迷い込んだイヴォンヌ・ド・ガレーの屋敷は後に取り壊されてしまうが、礼拝堂だけが残され、その中の墓石に次のような言葉が刻まれている—«Ci-gît le chevalier Galois fidèle à son Dieu, à son Roi, à sa Belle.»「神と王と美女に忠実なりし、騎士ガロワここに眠る」騎士道物語に不可欠の「美女」の存在はもちろん決定稿にも草稿にも見られる。草稿では、モーヌが子供の頃に出会った「アンヌ」という女性がサント・アガトに住んでいるということになっており、モーヌの冒険は聖遺物の探求であるとともに、子供の頃のあこがれの女性を探しに行く旅でもあった。

2. 決定稿におけるトポグラフィー

『グラン・モーヌ』の舞台は作者が生まれたラ・シャペル・ダンジョン周辺と、5歳から12歳までを過ごしたエピヌイユ・ル・フルリエル周辺のアマルガムとして成立していると言われるが、草稿と決定稿の地名を比較するなら、その相違は容易に見て取れる。上にまとめたように、草稿における地名はすべてエピヌイユ・ル・フルリエル周辺の実在の地名ばかりであり、アラン=フルニエが少年時代を過ごした地域が小説の舞台であったことは明らかだ。他方、決定稿においては「サント・アガト」の周りにある町や村としてラ・モット、ル・ヴィユー・ナンセー、レ・ランドなどの実在の名が使われているが、これらはすべてラ・シャペル・ダンジョン周辺の地名なのである。つまり地理上の位置は確かに作家の生地周辺に移動させられているのだ。ただし、上でも見たように、「サント・アガト」という名は、エピヌイユ近くの礼拝堂の名に由来しているばかりでなく、フランソワの住む町には「ベル・エトワール農場『La Belle Étoile』」、「十字路『Quatre-Routes』」、「片隅『Petits-Coins』」というようなエピヌイユに実在の地名が用いられていることから、決定稿における「サント・アガト」という町自体はエピヌイユをモデルとしていながら、その地理上の位置はラ・シャペル・ダンジョン周辺となっていると考えられる。それでは何故「サント・アガト」の位置が移動させられたのであろうか。

«L'endroit où il se trouvait était d'ailleurs le plus désolé de la Sologne. De toute la matinée, il ne vit qu'une bergère, à l'horizon, qui ramenait son troupeau. Il eut beau la

héler, essayer de courir, elle disparut sans l'entendre.»⁽²⁷⁾

「その上、彼のいる場所は、ソローニュ地方でもとりわけ荒涼とした一帯だった。午前中を通して、見かけたのは、地平線を家畜の群を導いている羊飼いの女ひとりだけだった。モーヌは大きな声で呼びかけ、そっちへ走ろうとしたが、羊飼いはそれも聞こえないまま、姿を消してしまった。」

これはモーヌがフランソワの祖父母を迎えて出かけ、途中で道に迷ってしまったときの周囲の情景である。ソローニュ地方というのは、ロワール川とシェール川に囲まれた地域に対する伝統的な呼び名で、行政単位であるシェール県とある程度重なっている。ソローニュ地方は高度100~150メートルの平原だが、起伏に富み、荒野や沼沢地が多く見られ、狩猟や魚釣りが盛んな地域である。ソローニュ地方の南部にあるエピヌイユ周辺は、確かにシェール川沿いに位置することによって、小説の一部においてその風景が使われてはいるが、町や村が多く、人が住む地域である。それに対して、シェール県の北部に位置するラ・シャペル・ダンジョンの周囲に広がる地域には、とりわけ森、池、沼、川、荒野が多く、その人気のない荒涼とした土地の雰囲気が、モーヌが彷徨し、謎の城を発見するのにふさわしい舞台であると作者は考えたのではないだろうか。ところで、モーヌの故郷としてラ・フェルテ・ダンジョンという架空の町が登場するが、確かにその名は、作家の生地であるラ・シャペル・ダンジョンから由来しているのであろう。フランソワがサント・アガトからラ・フェルテ・ダンジョンへ自転車で疾走してゆく印象深いくだりがあるが、その二つの町の位置関係を定めるのは困難である。⁽²⁸⁾

3. モミの森

物語のトポスとして考察すべきことは、地理的位置ばかりではない。森、山、川、平野など、自然の織りなす地形もまた重要な役割を果たしている。ここではとりわけ森というトポスに注目しよう。それはモーヌの冒険と密接な関係があるようと思われる。草稿においても、彼はフランソワを残して、一人馬に乗って森の中に入つてゆく—«Nous entendîmes les pas du cheval, au loin, qui claquaient sur la route gelée, qui s'assourdiront en entrant dans un bois de sapins. Puis plus rien. Je compris avec tristesse que mon compagnon s'en était allé vers les aventures.»⁽²⁹⁾「私たちは遠くで凍りついた道を踏みつけてゆく馬の蹄の音を聞いた。その音はモミの森に入る際に弱くなった。それからもう何も聞こえなくなつた。私は悲しい気持ちで理解したのだ、わが友が冒険に向かって行つてしまつたということを。」実際、草稿段階での冒険の目的地であるサント・アガトの礼拝堂に行くには、森の中を通つていかなければならぬことになっている(«Une fois la Villatte passée, on tra-

verse une lieue de bois et l'on arrive à la chapelle⁽³¹⁾) 他方、決定稿においてもモーヌはやはり森に沿ってゆく—«il longea quelque temps un bois de sapin⁽³²⁾』「彼はしばらくモミの森に沿って進んだ」。また、モーヌがイヴォンヌと結婚した日の夜、モミの森の中からフランツの呼び声が聞こえ、モーヌは森に入って、再び冒険の旅に出てゆくことになる。このように森は冒険と密接な関係を持っていると考えられる。一般的に言って、西洋において森は文明、社会、秩序、権力などに対立する「異界」であり、自然のカオスを象徴するものである。⁽³³⁾森に住むロビン・フッドが権力に抵抗する物語などは町と森というトポスの対立が物語の構造を作っていると言えよう。要するに、森の冒険は日常的な社会生活から逸脱した異次元の世界への冒険を意味するのだ。

森は冒険において通過する場であるにとどまらない。草稿においてモミの木立に囲まれたロマンチックな古い城のイメージが数度現れる—«sur les plus lointaines [collines] on découvrait, parmi les sapins, de petits châteaux romantiques, avec une tourelle.⁽³⁴⁾』「最も遠くの丘には、モミの木の間に、塔のある小さなロマンチックな城が見えた。」実際、モーヌの冒険の目的地も、初期段階のようなサント・アガトの礼拝堂から城に変わる—«Égaré dans la campagne, il marche longtemps et arrive à un château dans une petite vallée, entouré d'arbres.⁽³⁵⁾』「田園をさまよい、彼は長い間歩き、小さな谷間の、木立に囲まれた城に着く。」決定稿とは異なり、城館はシェール川沿いに位置しているが、モーヌの冒険の地となる礼拝堂も城も常に木に囲まれていることは注目すべきである。そして印刷稿におけるイヴォンヌ・ド・ガレーの屋敷もまたモミの森に覆われているのだ。

«il aperçut enfin, au-dessus d'un bois de sapins, la flèche d'une tourelle grise.⁽³⁶⁾»
「彼はついに、小さな灰色の塔の突端が、モミの森の上に突き出ているのを見た。」

«Jusque sur le Domaine déferlaient des bois de sapins qui le cachaient à tout le pays plat, sauf vers l'est, où l'on apercevait des collines bleues couvertes de rochers et de sapins encore.⁽³⁷⁾»

「モミの森が屋敷の上まで枝をのばし、そのため屋敷は平地から隠されていたが、東だけは別で、そこからは岩山や、やはりモミで覆われた青い丘陵を望むことができた。」

「不思議な屋敷」(«Le domaine mystérieux»)⁽³⁸⁾はモミの森に覆い隠されていることにより、その神秘性が強調されている。この森は実際、現代の文明社会から忘れられた貴重な宝とも言える古い城館と美しい女性を隠しているのである。またイヴォンヌ・ド・ガレーの屋敷で行われる「奇妙な祝宴」(«La fête étrange»)⁽³⁹⁾には、子供と老人しかおらず、しかも子供が

すべてをしきっているのだが、それはまさしく大人の原理に基づく文明社会に対立する子供の世界であり、大人の秩序に対立する異次元の世界なのだ。そしてモーヌとイヴォンヌの出会いもまたモミの森の前でのことであるばかりでなく、二人の結婚式もモミの森に隠された礼拝堂で執り行われる—『Le mariage s'est fait à midi, avec le plus de silence possible, dans l'ancienne chapelle des Sablonnières qu'on n'a pas abattue et que les sapins cachent à moitié sur le versant de la côte prochaine.』⁽⁴⁰⁾「結婚式は、正午に、レ・サブロニエールの古い礼拝堂で、できるだけひっそりと行われた。取り壊しを免れたこの礼拝堂は、近くの斜面でモミの木立に半ば隠されている。」ところでこの小説には二つの結婚がある。フランツ・ド・ガレーとヴァランチーヌ・ブロンドーの結婚、そしてオーギュスタン・モーヌとイヴォンヌ・ド・ガレーの結婚である。前者の結婚は、上でも述べたように、花嫁が身分違いを理由に屋敷に来る途上で逃げ出し、いったんは破談になってしまうが、後にモーヌがフランツとともに彼女を探し、二人は共に暮らすようになる。後者の結婚は、モーヌの長い探索の末、シェール川の岸辺で再会し、やっと成立することになるが、ヴァランチーヌとの関係の故に罪の意識を免れることができず、結婚の翌日旅立つことになる。彼の留守の間に一人の娘が誕生するが、イヴォンヌは出産が原因でまもなく死ぬ。これら二つの結婚がともに貴族と庶民の間の結婚であることは無視できない。大人=秩序の世界では困難な身分違いの結婚がモミの森の中では可能になっている。森という異界では現実世界とは異なる原理が支配しているのだ。

それでは、なぜモミの森なのだろうか。川崎寿彦によると、西洋における自然を代表する聖なる木はオーク（樫の木）である。長命であること、幹や枝が曲がっていること（直線は人為的とみなされる）、広葉樹であって、冬には落葉することなどから、オークは自然の生命を体現する木と見なされてきた。それに対して、モミの木は針葉樹であって、冬にも落葉しない常緑樹である。また幹や枝がまっすぐで直線的でもあり、オークに比べて、自然らしさが乏しいと言えるかもしれない。しかしながら、モミの木は常緑樹であるが故に、モーヌの冒険が行われる冬においても、秘められたものを隠すことができるという意味で、この小説にはよりふさわしいとも言えよう。そればかりではない。オークは、上に述べたような特徴から原始宗教における崇拝の対象となっていたのであり、異教的な木である。他方、モミの木はクリスマス・ツリーとして使われることからもキリスト教的な木であると言えよう。実のところ、モーヌの物語の源泉となった、作家とイヴォンヌ・ド・キエヴルクールとの出会いは、6月1日のキリスト昇天祭の日と、6月11日の聖靈降臨祭の日曜日のことで、この運命的な出会いにはキリスト教の祝日が重なっているのである。小説においても、モーヌがイヴォンヌ・ド・ガレーの住む屋敷にやって来たときに、故郷のラ・フェルテ・ダンジョンでの聖母被昇天祭の思い出が蘇り⁽⁴²⁾、また彼女がパリに滞在するのも復活祭および聖靈降臨節

のこととなっており、やはりキリスト教的コンテクストが意識されている。

ところで、モミの木はクリスマス・ツリーに用いられることによって、イエスの誕生と関連するが、この「ツリー」はもともとイエスが架けられた十字架を表しているのであり、イエスの死をも意味しているのである。またモミの木は棺桶の素材に使われるということもあって、死に対するコノテーションがある。たとえば《sentir le sapin》「モミの匂いがする」というフランス語の表現は「棺桶の匂いがする、余命いくばくもない」という死の近さを意味する。つまりモミの木には「誕生」と「死」という相反する象徴が含まれるのだが、言い換れば、それは「彼岸」と「此岸」との境界に屹立する木であるとも言えよう。そのモミの木に囲まれた城館で、モーヌとイヴォンヌの子供が誕生し、入れ替わるように産褥の病からイヴォンヌは死ぬ。モミの木の両義的な象徴はこの小説の中でも十全に機能していると考えられるのだ。

さて、キリスト教の祝日が物語の背景として意味深く用いられていることは上でも述べたが、モミの木が密接に関係しているクリスマスは小説の中で問題になっているのだろうか。物語の冒頭でフランソワの祖父母がサント・アガトにやって来るのはまさしくクリスマス休みを過ごすためであったことを思い起こさなければならない。そしてモーヌは勝手に学校を抜けだし、彼らを迎えてゆくのだが、途中道に迷ったあげく、イヴォンヌの屋敷にたどり着くことになる。モーヌはまさにクリスマス週間の始まりとともに冒險に出発するのだ—《Et c'est là que tout commença, environ huit jours avant Noël.》「そしてまさしくそこで、クリスマスまであと一週間というときに、すべてが始まった。」クリスマス週間はイエス生誕の12月25日の一週間前から始まるので、モーヌが学校から抜け出すのは12月18日ということになる。そして彼の帰還は「4日目」(《Le quatrième jour fut un des plus froids de cet hiver.》「4日目はその冬いちばんの寒い日だった。」)と記されているように、12月21日のことであると推定できる。青春の冒險が始まってからは、クリスマスに対する言及は一切ない。しかしながら、アラン=フルニエには《Dialogue aux approches de Noël》(「クリスマス直前の会話」), 《Jour de Noël》(「クリスマスの日」)というような、クリスマスをテーマやモチーフにしたような小品があることから考えても、モーヌの冒險の旅がクリスマス週間に設定されていることは意味があるようと思われる。

クリスマスは子供のための祝日である。小説の中で「奇妙な祝宴」、つまりフランツとヴァランチーヌの婚礼の祝いを企画し、準備するのがすべて子供たちであることは、これがクリスマス週間のことであるのを考慮すれば、キリスト教的背景を持っていることがわかる。ただし、クリスマス当日は物語の中で語られることはないことにも注意すべきであろう。花嫁は祝宴に姿を現すことはなく、祭りは未完成のまま終わる。このことはクリスマス前という時間的コンテクストと関連していると言えるかもしれない。モーヌは2日間に渡る彷徨の

末、モミの木に覆われたイヴォンヌの屋敷にたどり着くが、その時、幸福の予感とともにこの上ない感動と喜びを持つ。

«Et, sans presser le pas, il continua son chemin. Au coin du bois débouchait, entre deux poteaux blancs, une allée où Meaulnes s'engagea. Il y fit quelques pas et s'arrêta, plein de surprise, troublé d'une émotion inexplicable. Il marchait pourtant du même pas fatigué, le vent glacé lui gerçait les lèvres, le suffoquait par instants ; et pourtant un contentement extraordinaire le soulevait, une tranquilité parfaite et presque enivrante, la certitude que son but était atteint et qu'il n'y avait plus maintenant que du bonheur à espérer. C'est ainsi que, jadis, la veille des grandes fêtes d'été, il se sentait défaillir, lorsqu'à la tombée de la nuit on plantait des sapins dans les rues du ⁽⁴⁷⁾ bourg et que la fenêtre de sa chambre était obstruée par les branches.»

「そして、とくに足を速めたりせずに、道を進んだ。森の一角に白い柱にはさまれた並木道の入口があり、モーヌはそこへ入っていった。数歩進んだところで、驚きに満たされ、言いうのない感動に心乱れて、立ち止まった。それでも、同じ疲れた足どりで歩いて行った。氷のような風を受けて、唇はひびわれ、時々息がつまりそうだった。それでいて、驚くばかりの満足感が彼の心を高ぶらせていた完璧な、ほとんど人を酔わせるような静穏、ついに自分の目的は達せられ、あとはもう願わしい幸福があるばかりだという確信が。ちょうどこんなふうに、むかし、大きな夏祭りの前夜、気の遠くなるような感じがしたことがあった。それは日暮れ方、町の通りにモミの木が植えられ、彼の寝室の窓が、モミの枝でいっぱいになったときのことだ。」

イヴォンヌの城館へ行くのに、モミの森の中を通っていくのだが、その時モーヌは不思議な喜びに満たされる。その喜びは確かに、美しい女性との出会いという近い将来に対する期待に基づくものであろうが、ここではその感動がむしろ過去を想起させるということに注意を払いたい。それは「むかし」、つまり子供の頃のことであろうが、楽しみに胸を脹らませた夏祭り前夜の思い出である。そして記憶の想起をうながすのがモミの木である。これはまさにプルースト的な無意識的記憶の現象と言えよう。「大きな夏祭り」(«grandes fêtes d'été») は複数形で書かれているように、いくつかのキリスト教の祝日を指しているのだろう。上の節の直後で、モーヌの故郷ラ・フェルテ・ダンジョンにおける聖母被昇天祭の思い出が喚起される—«Il se trouvait dans un chemin pareil à la grand'rue de La Ferté, le ⁽⁴⁸⁾ matin de l'Assomption!» (「彼は聖母被昇天祭の朝のラ・フェルテの大通りに似た道にいた。」) 聖母被昇天祭は8月15日という真夏の祝日である。モーヌは12月のクリスマス前、冷

たい風が吹きすさぶ中を、荒涼としたソローニュ地方をさまようのだが、イヴォンヌの屋敷を囲むモミの木によって想起されるのが夏の思い出であることにも注意が引かれる。興味深いことに、不思議な屋敷にモーヌが滞在しているときには、春あるいは夏のような陽気になる—*Il fit quelques pas et se trouva comme transporté dans une journée de printemps.* (49) 「数歩進むと、まるで春の一日に誘い込まれたような気がした」、*Il faisait du soleil comme aux premiers jours d'avril.* (50) 「4月の初めのような陽ざしがこぼれていた。」、*On eût pu se croire au cœur de l'été.* (51) 「まるで真夏のようだった。」このように真冬であるにもかかわらず、春か夏のような陽気の中でモーヌとイヴォンヌの運命的な出会いがなされる。モミの森の中では異なる時間が流れているかのようだ、モーヌはまさしく子供時代の記憶の中にさまよい込んだとも言えよう。彼は冒険から帰還する馬車の中で子供のように眠る—*Dans la voiture qui fuyait au grand galop à travers la nuit, les deux enfants s'étaient rendormis. Personne à qui parler des événements mystérieux de ces deux jours. Après avoir longtemps repassé dans son esprit tout ce qu'il avait vu et entendu, plein de fatigue et le cœur gros, le jeune homme lui aussi s'abandonna au sommeil, comme un enfant triste...* (52) 「闇を突っ切って、全速力で走る馬車の中で、二人の子供たちは眠り込んでいた。この二日間の、不思議な出来事の数々を、話して聞かせる相手は誰もいない。見たり聞いたりしたことの一切を、心の中で長い間たどり直したあと、すっかり疲れ、胸がいっぱいになって、若者もまた眠りに身を任せた、悲しい子供のように...」要するに、モーヌの冒険は子供時代への回帰を意味しているのだ。アラン=フルニエが大人になってから体験した恋愛を、1890年代という彼にとって子供時代を過ごした時代に遡らせたこと、そしてパリという都会での出来事を少年時代の記憶に満ちたエピヌイユ・ル・フルリエル、さらには生まれ故郷であるラ・シャペル・ダンジョンという場に転移したこともこのことから理解できる。彼は1906年8月22日付けのリヴィエール宛の手紙で次のように書いている—*Mon credo en art et en littérature: l'enfance. Arriver à la rendre sans aucune puérilité, avec sa profondeur qui touche les mystères.* (53) 「藝術と文学における僕の信条、それは子供時代です。子供っぽくなく、神秘に達するほどの深さをもってそれを表現することなのです。」『グラン・モーヌ』こそは作家アラン=フルニエの文学上の信条を実現した作品であり、子供時代の夢と記憶が現実と交錯する物語なのである。

注

- (1) 1924年に作家の未発表の詩や散文を『Miracles』「奇跡」という総題のもとにまとめて死後出版された。これらの作品の中には『グラン・モーヌ』の多くの萌芽が見られる。
- (2) Alain-Fournier, *Le Grand Meaulnes*, «Classiques Garnier», 1986 (以下GMと略す), p. 159. 日本語訳は『グラン・モーヌ』(岩波文庫, 1998年) 天沢退二郎訳を参照としながら拙訳

- を用いた。
- (3) *GM*, p.159.
- (4) «Classiques Garnier»版には、『グラン・モーヌ』の草稿が«Notes préliminaires», «Plans», «Ébauches»という3段階に分類されて収録されている。
- (5) *GM*, p.431.
- (6) *GM*, pp.160-161.
- (7) ソローニュ地方は、パリ盆地の南方、ロワール川とシェール川に挟まれた地域のことで、シェール県を含んでいる。この地方については、後に物語のトポスを問題にする際に考察する。
- (8) ダニエル・リュヴェールは、草稿において明らかであったモーヌとヴァランチーヌの肉体的関係が決定稿では曖昧にされていることを指摘しつつ、この関係がもたらす罪の意識には外的要因よりむしろ内的要因の方に重点が置かれるようになっていることを強調する (*GM*, p. XXI)。
- (9) モーヌが冒険の旅に出かけるのも、また帰還するのも馬車に乗ってである。また第3部3章の冒頭で、フランソワがモーヌの故郷に向かって自転車を走らせていくときの夢のような疾走感が印象的に記されている (*GM*, p.306)。
- (10) 時間的分析に関しては、次の著作を参照のこと:Pierre Suire, *Alain-Fournier au miroir du Grand Meaulnes*, Seghers, 1988, pp.159-167.
- (11) *GM*, p.165.
- (12) *GM*, p.166.
- (13) *GM*, pp.430-431.
- (14) *GM*, p.430, note 18.
- (15) *GM*, p.281.
- (16) *GM*, p.290.
- (17) フランソワとモーヌはともに作者の分身であると考えられるが、これらの章においては、モーヌの言葉をフランソワがわかりやすく書き直すことによって、二人の主人公／語り手が合体しているとも言えよう。
- (18) *GM*, p.191.
- (19) «Notes préliminaires»は初期段階のものであると思われるが、«Plans»および«Ébauches»には古い層のものが混在している。初期段階を識別するおおよその基準は、主人公の住む町の名が「エピヌイユ」で、冒険の目的地が「サント・アガト」の礼拝堂となっていることである。
- (20) たとえば草稿のf109においては、まず現実の体験と同じように、少女との出会いの場をパリのセーヌ川の船着き場に設定するが («Souvent plus tard il se rappela cette minute où sur le débarcadère d'un bateau parisien de la Seine» [イタリック体は削除部分を示す]), 後に«sur le débarcadère d'un bateau parisien»を«sur le bord de l'étang»と改め、決定稿のように、ソローニュ地方の池の端が少女との出会いの場となる。
- (21) *GM*, p.446.イタリック体は削除された文を示す。
- (22) この最初期の執筆段階ではフランソワはまだ語り手ではなく、匿名の語り手が存在している。1909年に遡る下書きであろうと推定されている (*GM*, p.443, note 6)。
- (23) *GM*, p.441.
- (24) *GM*, p.444.
- (25) 天沢退二郎は、モーヌがイヴォンヌの屋敷をはじめて見た時のイメージが、クレチアン・ド・トロワ『ペルスヴァルまたは聖杯の物語』における聖杯城の現れ方と類似していること

を指摘している「ついに、小さな灰色の突端が、モミの林の上に突き出ているのを見た。」

(『グラン・モーヌ』, *GM*, p.204) ; 「一つの塔の先端が現れるのが見えた。」(『ペルスヴァル』第3051行) (『グラン・モーヌ』, 岩波文庫, pp.402-403.)

(26) *GM*, p.296.

(27) *GM*, p.204.

(28) 第3部の『La Partie de plaisir』「野遊び」という題を付けられている5章, 6章はシェール川沿いが舞台となっており, そこでモーヌはイヴォンヌと再会する。シェール川からほど遠からぬところに彼女の屋敷があるのだが, このことは上で検討した地理上の位置とは矛盾するように思われる。「不思議な屋敷」はル・ヴィユー・ナンセーの近くに設定されているが, 実在のこの町はシェール川からは大きく離れているのである。

(29) 第3部3章の冒頭 (*GM*, p.306)

(30) *GM*, p.446.

(31) *GM*, p.442.

(32) *GM*, p.195.

(33) 川崎寿彦『森のイングランド』, 平凡社ライブラリー, 1997。

(34) *GM*, p.393.

(35) *GM*, p.405.

(36) *GM*, p.204.

(37) *GM*, p.221.

(38) 『Le Domaine mystérieux』は第1部11章のタイトルとなっている。

(39) 『La Fête étrange』は第1部13章, 14章および17章のタイトルであり, フランツ・ド・ガレーとヴァランチーヌ・ブロンドーとの結婚の祝宴のことであるが, 花嫁が来ず, 途中で散会することになる。

(40) *GM*, p.331.

(41) 川崎寿彦, 前掲書。

(42) *GM*, p.205 : «Il se trouvait dans un chemin pareil à la grand'rue de La Ferté, le matin de l'Assomption !』「モーヌは聖母被昇天祭の朝のラ・フェルテの大通りに似た道にいた。」聖母被昇天祭は8月15日の祝日。

(43) *GM*, p.169 : «Tous les ans, nous allions les [les grands-parents] chercher, quelques jours avant Noël, à la gare, au train de 4h 2. Ils avaient pour nous voir, traversé tout le département, chargés de ballots de châtaignes et de victuailles pour Noël enveloppées dans des serviettes.』「毎年私たちは, クリスマスの数日前, 駅へ, 4時2分の汽車で来る二人を迎えて行く慣わしだった。私たちに会うために, 栗の実やクリスマス用の食物の包みを鞄につめて, 県の端から端までをよこぎって来てくれるのだ。」

(44) *GM*, p.167.

(45) *GM*, p.182.

(46) モーヌの冒險の旅の日程を簡単にまとめるなら以下になる—12月18日の昼食後, 学校から抜け出す／18日の夜ある羊小屋で寝る／翌日19日の午後3時頃ガレー家の屋敷に着く／20日の夕食後屋敷から出発する／21日の早朝にサント・アガトに帰還する。

(47) *GM*, p.204.

(48) *GM*, p.205.

(49) *GM*, p.220.

(50) *GM*, p.220.

- (51) *GM*, p.223.
- (52) *GM*, p.235.
- (53) Jacques Rivière et Alain-Fournier, *Correspondance 1905-1914*, Gallimard, 1948, p. 323. アラン=フルニエはさらに次のように続けて書いている—«Mon livre futur sera peut-être un perpétuel va-et-vient insensible du rêve à la réalité; «Rêve» entendu comme l'immense et imprécise vie enfantine planant au-dessus de l'autre et sans cesse mise en rumeur par les échos de l'autre.» 「僕の将来の本」は『グラン・モーヌ』という形となって世に知られるようになる。

Le "temps perdu" et le "lieu perdu" dans *Le Grand Meaulnes* d'Alain-Fournier

Akio WADA

Le Grand Meaulnes, roman d'adolescence, paru en 1913, est basé, on le sait, sur les expériences amoureuses qu'a éprouvées à Paris au début du 20^e siècle son auteur Alain-Fournier. On remarque donc la transposition du cadre temporel et spatial dans le roman, dont l'histoire se déroule en Sologne dans la dernière dizaine d'années du 19^e siècle.

L'écoulement du temps est important pour la période transitoire qu'est l'adolescence. Il est aisé en effet de suivre le fil temporel de l'histoire dans ce roman. On y trouve toutefois trois lacunes ; les deux premières concernent les jours de bonheur des deux jeunes couples enfin fiancés, qui ne sont pas essentiels pour l'histoire de l'aventure, sujet principal du roman, suscitée par la distance entre l'amoureux et l'objet aimé. L'autre lacune de six mois, capitale pour la structure de l'œuvre, qui existe entre la deuxième partie et la troisième, se rapporte au secret de Meaulnes qui ne sera révélé qu'à la fin sous la forme de journal intime : effet de suspense et aussi révélation rétrospective de ce qui a causé le changement des personnages qui sont devenus adultes.

Un examen des manuscrits du roman nous apprend que l'auteur retrace d'une façon assez fidèle, dans le premier jet, la géographie des environs d'Epineuil-le-Fleuriel, petite ville située au sud du Cher, où il a passé son enfance (de 5 ans à 12 ans). Il est pourtant curieux de constater qu'il transpose au fur et à mesure la scène du roman en gestation aux alentours de La Chapelle d'Angillon, village natal de l'écrivain, qui se situe au nord de la même région ; ce nouveau site, désert et désolé en fait, est plus propre, semble-t-il, aux aventures de Meaulnes. Ainsi Alain-Fournier s'emploie-t-il à ressusciter le temps et l'espace de son enfance avec la couleur locale et même celle du siècle précédent désormais disparu.